審査論文の要旨

本論文は、中国後漢代から南北朝時代を中心に、考古資料を用いて中国における仏教の受容やその性格を検討しようとした論文である。中国仏教に関する資料は南北朝時代以後が豊富であり、中国仏教史の研究もこの時期以後が中心であった。しかしながら、初期仏教にかかわる資料の増加もあり、既知の資料の見直しから、仏教に関する遺物を抽出することも可能になっている。本論文は、このような資料の状況をふまえ、仏像を表現した器物、あるいは仏塔を模した模型などを吟味することから、中国における仏教の受容過程とその性格を論じている。また、資料の分布の偏りも考慮することから、インドを起点とする仏教の伝播ルートへのアプローチも試み、ものの変容過程を注目することを通して、異文化としての仏教をどのように理解し受容したかという点にも迫ろうとした。このように、中国初期仏教に関わる遺物の博捜から積極的に中国仏教の受容過程とその性格を論じたことが本論文の最大の特徴と言える。もちろん、先行研究においても仏教の受容過程は重要なテーマとなっているが、それを総合的に俯瞰し、全体像を浮かび上がらせた点がこの論文の大きな達成である。

本論文は、大きくは４つの章からなり、それに序章と終章を付加した構成をとる。１章と４章は査読誌に掲載済みの論文であり、他の２章はそれぞれ投稿中の論文である。

まず、第１章では、揺銭樹と呼ばれる貨幣を象る後漢代の器物に仏像がしばしば表される事例を取り上げた。道教のモチーフである西王母に置き換えて仏像が登場するという通説に対し、仏像の両脇に胡人の像が配される例がみられることや、梵天勧請の場面を示す図像があることなどを根拠に、西域の仏教の影響を受けて四川地域で製作されたものであり、交流の結果を示すことを強調する。そして、何よりも銭を表現し、富への希求が揺銭樹の主要な目的であり、仏教的な性格は薄いことを論じている。このような点から、四川の人々の仏教に対する理解を表すものであっても、胡人の影響を示しているとみる。

第２章では長江中下流域における初期の仏像表現を系統的に整理している。後漢末からは鏡に仏像が表現され、とりわけ八鳳鏡という器種によく表れ、それが女性の副葬品として用いられることから、女性の仏教信仰を示すと考えた。続いて、陶磁器での仏像表現についてとりあげ、孫呉時代から西晋時代にかけて登場することを明らかにする。とくに神亭壺と呼ばれる多くの小像を貼り付けた壺に仏像が東晋時代にかけて流行することに注目した。また、仏像造形は墓磚にも表され、神亭壺にほぼ平行する形でみられることを明らかにした。以上の仏像の表現について検討した結果、後漢末にはシルクロードを介したガンダーラなどの西方仏教の影響がみられ、時期が下ると陶磁器の造形では、獅子座のモチーフが表れることから南方経由の仏教伝播も想定している。その仏像の表現は禅定印を結ぶ座仏が中心であることを示し、仏教教義にも言及した。また、これら長江中下流域で普及していた仏像の表現が東晋時代に消滅することにも注目しており、中国仏教の展開を考えるうえで重要な指摘と言えよう。

第３章では中国の初期仏塔に関する遺物について検討をおこなっている。一つは河南省鞏県のあな蔵から出土した銅製の塔形品である。共伴遺物から後漢代に位置づけられ、覆鉢の表現があることからストゥーパを象ったものとした。帳や香炉などとともに用いられ

たことがわかるため、文献に表れる「浮屠」の信仰に関わるものと理解した。もう一つの器物が襄樊の菜越１号墓から出土した陶製楼閣であり、相輪の表現があることと祠堂を構成することから西域のチャイティア堂を模した器物と推定した。以上の二つの遺品から、ストゥーパとチャイティアの建造物が後漢代にあり、東晋時代に「塔」の文字で示されたものの中に両者が含まれていると論じている。

第４章は、以上の三つの章とはやや異なり、地中に仏像を埋める行為、埋仏を取り上げている。南北朝の遺物が含まれる 35 例を抽出し、三つの類型に分けて、その意義を考察した。A 類は破壊によるもので、廃仏などが背景にある。B 類は仏像の保護のため、丁寧に埋められることに特徴がある。C 類は使用に堪えない仏像の処分であり、仏像の埋葬と言える。これら３類型に分けることから、それぞれの埋仏の背景についてそれぞれ検討することに道が開け、埋仏行為の思想的背景にも迫ることが可能となっている。

終章では以上の検討をまとめ、時系列上で整理をおこなっている。その結果、第１段階である後漢早中期は、四川地域を中心とする、胡人との接触による仏教の受容であり、仏教の経典の訳出には至っていない段階である。第２段階は後漢末・三国・西晋時代であり、仏典の漢訳がともない、中国の人々への仏教の布教が始まり、さまざまな器物に仏像が登場するようになった。第３段階は仏教が定着した東晋南北朝時代であり、本格的な仏像と寺院建築が登場したとする。

以上のように、本論文は、中国初期仏教に関する考古資料に対する緻密な分析にもとづき、それぞれの資料の年代を丁寧に比定する一方で、仏像表現の特徴も綿密に検討し、仏教の受容過程、およびその性格、そして変容過程を明らかにし、豊かな中国初期仏教史を描くことに成功している。ただし、仏教の広範な普及期と言える東晋南北朝期を射程に入れているものの、その時代についての言及が少ないため、初期仏教からの展開過程が不明瞭であることが惜しまれる。しかしながら、初期のあり方については器物への深い理解にもとづき、地域差も考慮しつつ、異文化である仏教がどのように理解され、採り入れられたかという問いに対して、具体的な回答を示すことに成功している。また、これまで中国仏教史で用いられてきた文献記録についても考古資料との対比から新たな解釈を示しており、独創性の高い研究として評価できる。